

# 完了報告書兼事後評価報告書

## 1. 基本情報

(1)事業名 鋸南町復興促進プロジェクト

### (2)団体概要

<目的> 台風15号、19号、21号により被災した鋸南町住民や台風被害で困窮している人の生活再建を今後も長期にわたって継続し、コミュニティの崩壊を防ぐための活動を、持続的に運営していく体制をつくることが目的である。特に、自力で生活再建することが難しい高齢世帯、独居者のサポートをしていく。また、情報発信やイベントなどを行い、今後の災害に対する備えの意識を広く町民に伝えて行き、災害に強い鋸南町として再生していくことを目指す。こうしたイベントや鋸南町再生の活動への参加を通じて、鋸南町に来る関係人口を増やし、地域の活性化と地域のコミュニティづくりを推進していくことも目指す。

#### <活動内容>

(1)復興ボランティアセンターの運営支援と、それを通じた人材育成

技術系ボランティア団体・外部支援団体が鋸南町にいる間に、復興ボランティアセンターの運営支援の実務をセンターのスタッフとともに学びながら、実務各ステップの業務内容を把握し、主体的に行えるようにしていく。

(2)情報発信・イベント参加による防災の啓発

様々な媒体での情報発信、イベント参加による防災の啓発と、コミュニティづくりの活動等を行う。

(3)実行団体名 鋸南復興アクセラレーション

(4)設立年月日 2019年12月4日

(5)新型コロナウイルス対応緊急支援助成（通常枠での追加助成）の有無 無

(6)提出日

## 2. 事業概要

(1)実施時期 2020年5月～2022年3月

## (2)対象地域 千葉県安房郡鋸南町

## (3)事業対象者

直接的対象グループ：被災者のうち高齢者等を中心とした要支援世帯

間接的対象グループ：鋸南町における住家被害を負った全世帯

## (4)総事業費(うち評価関連経費)

14,770,938円（うち評価関連費 639,683円）

## (5)社会課題

### <地域の被害状況>

鋸南町では台風15号により町全体の68.1%、約2510棟の家屋が屋根損傷と雨水家屋内侵入等による甚大な被害を受け、その後の台風19号、21号はさらに追い打ちをかけた。

町の中心部や、その沿岸地域には被災家屋が集中した。また、内陸、山間地域では、古くから使用されている伝統家屋も多く、あちらこちらで被災した。これらに対し、災害ボランティアセンターと外部からの技術系ボランティア団体、一般ボランティアが一丸となって被災家屋の対応にあたった。社協「災害ボランティアセンター」が閉鎖した後も、屋根応急処置ニーズは150件以上が残っていたため、社協内に「復興ボランティアセンター」が存続したが、2020年4月には外部支援団体が撤退予定であったが、令和2年1月以降も、新たに80件のニーズがあがってきていた（令和2年3月12日現在）。また、要配慮世帯を含めた被災世帯のカビ除去のニーズは多く潜在していることが新たにわかった。

一度張ったブルーシートは平均3ヶ月以内で劣化するため、張り替えを必要とする世帯が多数出てきており、鋸南町では長期的な支援が必要であるが、技術系ボランティア団体や外部支援団体は徐々に離れていくため、町内の住民が中心となってボランティア活動を継続していく体制をつくる必要がある。

また、台風発災後、人口が流出している状況である。また、生活の再建ができない高齢者や困窮世帯の支援をし、地域内のコミュニティ再構築をし、孤立を防ぐことが必要である。

### <解決すべき課題>

#### 1.被災者の家屋復旧支援のためのボランティアセンターの存続

発災から6ヶ月経った今なお、鋸南町ではブルーシートで応急処置したままの家屋が残存しており、本修理が済んだ家は数少ない。千葉県の情報共有会議議事録によると、暴風被害を受けた千葉県南部を含めた県全体で、約74000件の罹災があったうち、2月18日時点で修理依頼済みが2076件、修理完了が529件と、修理完了した割合は、1%にもみたない。

ブルーシートは3ヶ月程度で劣化し、放置すると穴があいたり、破けたりして家屋の損傷が激しくなってしまう。これは、雨漏りや湿気等の侵入をもたらすほか、カビの発生にもつながり深刻な問題となっている。

屋根の本格修理は、地元の工務店の話によると、職人不足のために完了まで約2年待ちの状況となっている。最低限の住環境を維持するためには、本修理までの間に発生する応急処置の張り替え対応や、カビ除去を行っていく必要がある。

これらのニーズ把握と外部の技術系ボランティア団体の支援のマッチングのため、復興ボランティアセンターを国際NGO「ADRA JAPAN」と「ピースボート災害支援センター」が行っていたが、2020年3月にピースボート災害支援センターが、ADRA JAPANが4月をもって撤退する予定（継続支援が必要ではあるが、団体母体の展開次第で撤退）である。ため、今後も長期継続的な活動が必要となる鋸南町において、ボランティアセンターの機能を残す必要がある。

なお、高齢独居世帯や障害者などは、支援制度の存在も知らず、ボランティアセンターにニーズを挙げることもできずにいる。鋸南町復興室長によれば、生活保護世帯が鋸南町内に66世帯あり、被災世帯は内64世帯とのことだが、被災から半年以上経過した今なお、継続的な支援が必要な状態となっていると思われる要支援者について、行政も正確な数値を把握できていない。なお、千葉南部災害支援センター（南房総地域における台風15号被害に関する支援団体）主導で、ピースボートとADRA、当団体にて3月下旬に実態調査を行う予定となっており、今後これらの要支援者に対する支援をアウトリーチで届けていく必要がある。

住民と屋根やカビ除去などの専門人材を繋ぐハブとして重要な役割を果たすのが、ボランティアセンター運営である。上記専門人材を生かし支援していくためにも、ボランティアセンターの存在が必須であり、ボランティアセンターを運営できる人材を育成していくことが必要である。

## 2. 屋根応急処置やカビ除去に対応する専門人材の育成 ※PMJ支援のち、2021年9月より休眠

台風15号発生から半年以上が経過し、一般ボランティアを含め、技術系ボランティアも撤退しつつある中、地元で人材を確保していくことが急務である。特に、台風15号によって損壊した屋根に張ったブルーシートは3か月ほどで劣化し、今後2年間はブルーシートの張替えが必要であると予測されているが、この対応には高所作業や専門技術が必要であり、習熟者からの訓練を受け身につけていく必要がある。ブルーシートを張り替えられる人材を確保するだけでなく、人材を育成していくことが課題である。

また、屋根の損壊した家屋には、雨水が入り込み、多くの家屋にカビが発生している。このカビを常時、除去していくボランティアを呼び込む、もしくは人材を育成することが必要である。

なお、専門人材の育成のためには、単に講習会を開けばよいというものではなく、鋸南町の現状を知り、アクセラレーションとともに活動したいと共感する人が、カビ取り、屋根下作業、そして屋根上作業と、徐々に活動の幅を広げる中で、スキルを磨いていくプロセスが重要である。このため、現在の候補者に対してスキル付与を進めるとともに、活動全般の情報発信によりボランティアへの感度が高い方を集め、支援者の裾野を広げ人材育成につなげていく必要がある。

## 3. 情報発信及び地域コミュニティづくり

1月頃より、住民が支援を求め続けることに疲れ、ニーズが上がらない傾向がある。また、前述のように高齢者や障害者など声を上げられずにいる方も多い。そして、現段階で復興ボランティアセンターが機能していることを知らない方も多い。

そのため、町の回覧板やSNSを通じ、復興ボランティアセンターの機能を周知した結果、2020年1月末で新規ニーズとして74件が新たに把握された。よって、情報発信が今後も必要である。

また、これらニーズの把握のためには、「地域コミュニティづくり」も併せて進める必要がある。地域でアクセラレーションの活動を知つてもらう中で、地域の困っている方の情報を得ること、住民がリラックスして悩みを出せる場を設けることなどで、支援につなげるような取組が必要である。

それとともに、「地域コミュニティづくり」の場を介して、災害による転居が重なったことにより崩壊しつつある住民同士のかかわりや繋がりを深めて、共助創出の場になるような取組が必要である。

## 4. 中長期的な復興に向けた関係人口の確保

また、中長期的には、鋸南町の関係人口を増やすことも課題としてある。台風は、来年以降も南房総エリアを襲うであろう。その災害に対する備えをするためにも、鋸南町に关心を持つてくれ、有事の際にはボランティアとして来てくれる人の確保が必要である。

#### (6)事業実施の目的

台風15号後、鋸南町の6割以上の家屋は屋根損傷と雨水の家屋侵入により大きなダメージを受けた。現在、屋根が損壊した家の住民は、カビだらけの天井や床の上で生活している状況である。こういった住民のうち、特に独居世帯や高齢世帯など、自力で生活再建が難しい人々をサポートし、町を復旧させていく。さらに、町内の住民の防災意識を高め、ボランティア活動を継続していく体制をつくり、災害に強い町づくりを目指す。

#### (7)短期アウトカムの総括

1. 鋸南町において台風被害で家屋が崩壊した被災者に対し、技術ボランティア団体の活動をマッチングすることによって家屋応急復旧支援を提供できている。
  - ・現場の技術系ボランティア団体と定期的に会議をし、常に情報共有をしながら、現在あるニーズを現場団体に引き渡していく。
2. 鋸南町住民に対する「防災・減災への啓発活動や、地域としてのつながりを取り戻すための体制」が整備できている。
  - ・定期的に各地区で「足湯とお茶会」を開催し、地域の人のつながりや心のケアにつながる活動ができたと感じている。また、住民向けの「災害ボランティア講座」を開催したり、放課後子ども教室での「減災ゲーム」や「ブルーシートで寝袋づくり」などを実施。次世代に向けての防災に関する啓蒙活動も行えたと感じている。

#### (8)具体的な活動の内容と写真

##### 【ボランティアセンター運営支援】

- ・「鋸南町社会福祉協議会」と協定を結び、「鋸南町ボランティアセンター」の一室で復興ボランティアセンターの機能を当団体が行っている  
主に、屋根のブルーシートの張替えや、室内のカビ除去作業のニーズを活動団体へ繋ぐ。  
また、本修理見込みがない生活困窮世帯へは、状況のより詳しい聞き取りをし、被災者さんが使用できる支援制度があるかなどを、行政にうかがいながら、支援活動へ繋ぐ。



### 【現地調査の様子】

- ニーズが入ってくると、現地調査を行い、支援団体へ引き継ぐ。依頼内容を深く聞き取り、被災者さんの心の安らぎとなるよう傾聴活動を行っている様子。  
屋根や室内の養生が終わること、本修理が終わることだけでなく、孤立しない、心に寄り添う活動が重要と考える。



### 【屋根作業活動支援団体が活動している様子】

- 雨漏れのある家屋のニーズを、支援団体へ引き継ぎ、屋根養生支援へ入っているところ。



#### 【室内作業活動支援団体が活動している様子】

- ・室内のカビ除去ニーズを、支援団体へ引き継ぎ、室内のカビ除去作業を行っているところ。



## 【情報発信】

台風被災で浮き彫りになったことの一つとして、情報発信ができない人、受信できない人が多く、災害に対する心構えができていなかったということもあり、災害に関する情報の発信を充実させた。また、いまだに苦しんでる被災者のニーズを拾い上げるために、役場の協力を得て、町報と一緒に広報誌を全戸配布し呼びかけをした。

### 【Web／Facebook／Twitter】



The screenshot shows a Facebook post from 'Kyonan Fukkou Acceleration' with the caption: 「鋸南復興のカビ除去をする部屋を仕切ります。」 (We are dividing a room where mold removal is being done). The post has 21 likes and was shared by 'Meta Business Suite'.



The screenshot shows the Twitter profile of 'kyonacceleration'. It includes a bio: '令和元年の台風15号で被災した、鋸南町で活動する災害支援団体です。' (We are a disaster support organization active in Kyonan town after Typhoon 15 in Heisei 30), a link to their website 'kyonanacceleration.org', and a note: '2021年8月からTwitterを利用しています' (We started using Twitter in August 2021). The profile has 26 followers and 30 following.



The screenshot shows the website 'kyonanacceleration.org'. It features a logo with a rainbow over mountains, the text '鋸南復興アクセルレーション' and '@ky\_acceleration', and a message: '令和元年の台風15号で被災した、鋸南町で活動する災害支援団体です。' Below this are links to their website and Twitter account, and a note: '2021年8月からTwitterを利用しています'.

**ツイート** **ツイートと返信** **メディア** **いいね**

固定されたツイート

鋸南復興アクセルレ... 2021/09/08  
【Yahoo！ネット募金に掲載いただいています】

みんなの温かいご支援、ありがとうございます。

今後の活動資金として、ありがとうございます。 +

## 【地域コミュニティづくり】

台風被災とその後のコロナ禍により、地区によっては家を解体し、町外に出てしまった人の多いところもある。その結果、地域コミュニティの崩壊の危機に面している場所もある。そのため、「足湯とお茶会」をして、地域の人が集まり、リラックスしながら、談笑していく場所づくりをしていった。住民に好評で、この「足湯とお茶会」の中で地域の被災状況を把握

握できるケースもあった。また、オンラインとオフラインで活動報告会を開催し、地域住民や災害支援に興味のある方にご参加いただき、情報交換をすることができた。

### 【活動報告会】

コロナ禍に入る前は、当団体の拠点である「鋸南工アルポルト」で、月一回活動報告会を行っていた



### 【活動報告会（zoom）】

コロナ禍に入り、住民や支援者などと直接会う報告会が難しくなり、月一回オンラインで活動報告会を行っている様子

**【ゆるく災害を語る会（zoom）】令和3年10月27日・令和3年11月24日・令和3年12月20日**  
活動報告会をzoomで行っていたが、支援者がどのような形で災害支援に係るようになったのかなどを、支援者をゲストにゆるく災害を語る会へ形を変え、行っている様子



## 地域コミュニティづくり「足湯とお茶会」

台風被災により家屋が壊れ、町外に人口が流出してしまった結果、地域コミュニティが崩壊の危機にある。地域住民の交流の場をつくり、被災による心の傷を癒していただこうと町内のコミュニティセンターで足湯とお茶会イベントを開催した。ゆっくりと足湯につかっていただく中で、「被災で室内にカビが発生している」という話が出ることもあり、結果的にアウトリーチにつながった。

## 地域コミュニティ支援【足湯とお茶会@岩井袋地区】



地域コミュニティ支援【足湯とお茶会@鋸南工アルポルト】

地域コミュニティ支援【足湯とお茶会@内宿地区】



地域コミュニティ支援【足湯とお茶会@中佐久間地区】

地域コミュニティ支援【足湯とお茶会@吉浜地区】

地域コミュニティ支援【足湯とお茶会@岩井袋地区】令和3年5月11日



地域コミュニティ支援【足湯とお茶会@両向地区】令和3年6月22日



地域コミュニティ支援【足湯とお茶会@中道台地区】令和3年12月15日



### 【活動報告会＆フルート演奏会】令和3年7月19日

コロナが落ち着いてきたが、コミュニティ支援の活動である足湯とお茶会を各区で行うのは難しい状態が続いたため、ボランティアセンター内で、感染症対策をした上で、活動報告会にプラスして癒しの場でもある演奏会を取り入れた。

千葉フルート愛好会の皆さんが演奏している様子（メンバーには鋸南町在住者も）



### 【活動報告会＆ハンドベル演奏会】令和3年11月2日

演奏会が好評だったため、第2弾として、町内でハンドベル演奏のボランティア活動をしている方々をお呼びし、演奏会を開催。ハンドベル団体の方々は、従来老人施設などで演奏をしているが、コロナ禍で披露の場がないため、町内のボランティア団体をお呼びすることができ、演奏者も参加者にとっても癒しの場となった。



### 【活動報告会＆ピアノ演奏会】令和3年12月21日

活動報告とともに、後半演奏会をするスタイルも浸透しており、期待する方も増えてきた。プロの演奏者をお呼びし、クリスマスに合わせた曲を演奏し、クリスマスの雰囲気を皆で共有できる機会となった。また、ずっと使用していなかったピアノの調律を社協さんが行ってくださいり、ホール内でのピアノ演奏や音楽の活性化の一助となった。



### 地域コミュニティ・減災支援

台風被災をして傷ついたのは大人だけではない。子どもは声をあげないだけで、深く傷ついていることがある。次世代の防災教育に力を入れていくことも、災害に強いまちづくりにつながると考え、放課後子ども教室などで「防災工作」や「防災ゲーム」を開催した。

#### 【ボランティア教室・小学生】

小学生向けに、ボランティアスクールを実施し、アシスト瓦づくりを体験してもらった。瓦の模型を使って、実際にアシスト瓦をはめていく様子を見ながら、小学生は屋根や瓦の構造を知り、瓦が損壊した際に「自分にできること」を学んだ。



#### 地域コミュニティ・減災支援【ボランティア教室・中・高校生】

鋸南ロータリークラブが主催する「避難所開設ゲーム（HUG）」に参加し、中高生に自分の街で災害が起きて、避難所を開設することになった場合、「自分が何をすればいいのか」、災害を自分事として考えてもらうきっかけづくりをした。



#### **地域コミュニティ・減災支援【防災減災教室・幼稚園児】令和3年10月22日**

幼稚園の避難訓練に合わせ、講師として参加。

防災〇×クイズや、「ダンゴムシ」のポーズ（何もないところで地震が起きたら身を守る方法）、保護者向けに「おやつは心の栄養」と題したペーパーを配布し、避難バッグに賞味期限の長いおやつを入れておくことを推奨し、園児にもお話しした。

#### **地域コミュニティ・減災支援【放課後子ども教室】**

次世代への人材育成として、放課後子ども教室でゲームや工作を通じて防災、減災に関する知識などを身に着けてもらう講座を開催した。

#### **地域コミュニティ・減災支援【小学生向け防災クイズ・放課後子ども教室】令和3年12月2日**

鋸南町教育課の生涯学習として行われている放課後子ども教室へ「防災」として参加。児童の減災力、日頃の備え、自助・共助育成に寄与する活動を行う（以後定期的に行っている）



地域コミュニティ・減災支援【放課後子ども教室・工作】令和3年12月9日



地域コミュニティ・減災支援【放課後子ども教室・防災カードゲーム】令和4年1月20日



地域コミュニティ・減災支援【放課後子ども教室・工作】令和4年1月27日

## 地域コミュニティ・減災支援 【自主防災組織の課題共有】

町内の自主防災組織がどうなっているのかを調査。その結果、防災組織体制の横のつながりが薄く、機能しているところと機能していないところがあることを把握できた。地区によって体制に格差があることを確認。こういった実態を把握したことを、行政等と情報共有し、台風接近時に、見回りで被災者の家を回って声掛けをした。





## 地域コミュニティづくり・人材育成 【災害ボランティアセンターってこんなとこ】令和3年8月10日

ピースポート災害支援センターの垣貫紀彦氏を講師としてお呼びし、「災害ボランティアセンター」の役割や立ち上げに関する講演を行っていただいた。町内外から18人が参加。災害が起きたとき、住民が自分ごととしてとらえていくことの大切さや自分にもできることがあることを考えていただくきっかけになった。



### 【災害ボランティア講座 第2回】令和4年1月19日

「自分の町が被災したとき、住民としてどのようにボランティアにかかわることができるか」という視点から住民向けに開催。

「共助」について。そして、ボランティアへの関わりのきっかけづくりとして、難しいことではなく、「自分の持っているスキルを活用した災害時のボランティア」という話しを主テーマとした。

当日の様子を、地元新聞「房日新聞」で取り上げられる。



### 3. 事後評価の結果

#### (1) 事後評価の実施体制

- ・実行団体スタッフ
- ・一般社団法人RCF

#### (2) 「課題の分析」に関する振り返りと学び

##### ① 特定された課題の妥当性

「被災者の抱える課題の構造について適切に把握できているか」

・発災から4か月経過した1月から5月の時点で新規ニーズが144件あり、5月20日現在の残ニーズ数が30件あることをふまえても、今後も一定数の方の屋根応急処置やカビ除去に対応していく必要があることを把握した。

・また、近隣の方が台風後転居し、話仲間がいなくなる、ブルーシートのバタつきが気になり不安で眠れないなどの心の悩みを抱えている方が多いことを地域の人の聞き取りの中で把握した。そのため、コミュニティの創出に対するアプローチをし、足湯やお茶会などを通し、ゆったりとくつろげる場づくりを創出した。

・発災当初の情報発信の遅れが、被災状況確認への遅れや、地域住民の不安を増強した。そのため、情報発信の大切さを改めて感じ、毎月広報誌を発行し、Facebookやツイッター、サイトなどで情報発信に力を入れていった。

・発災から時間が過ぎ、さらに同時多発的に国内で災害が起きる中、外部から来るボランティアさんが減少していくことが明確だった。そのため、地域で災害支援ができる技術系ボランティアの人材育成をしていくことの重要性を把握した。

##### ② 特定された事業対象の妥当性

「町内の被害状況と被災者の数的情報を把握できているか」

「支援対象者を特定し、その課題の分析ができているか」

・鋸南町の住宅の被災は68.1%であり、激甚災害指定となった。同時期に被災した南房総市や館山市、鴨川市と比較しても大きな被災状況であることを定量把握した。

・鋸南町で活動しているボランティア団体「鋸南ロータリークラブーボランティアグループ」の報告から、瓦が壊れた家屋でカビが発生はじめ、困窮世帯や健康に問題のある被災者の生活や健康状態が悪くなり、ますます生活再建が困難になる可能性があることが確認された。また、高齢化率の高い町でこれらのニーズが潜在的に多くあることが推測された。

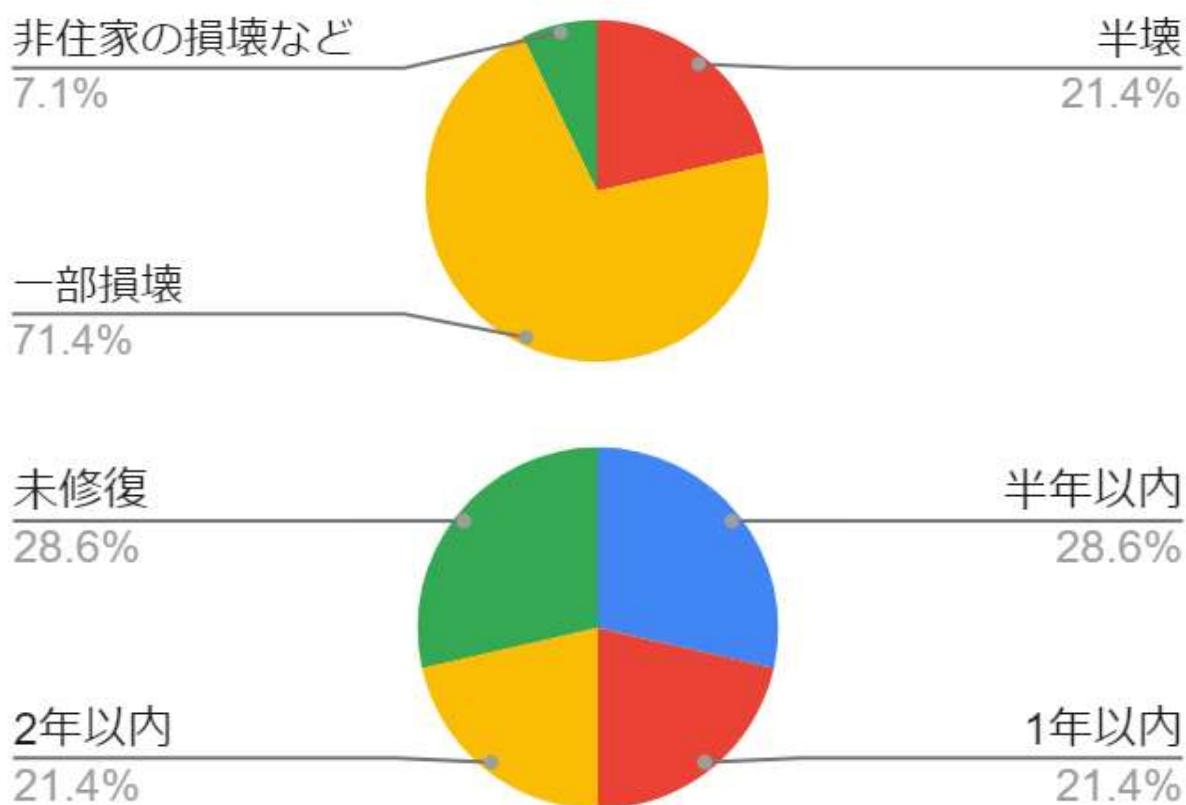
・鋸南町の中でも特に被災が大きかった岩井袋地区を中心に、災害が大きかったエリアや防災に关心の高い地区を中心に「足湯とお茶会」を実施することで、被災者の心のケアを行つた。

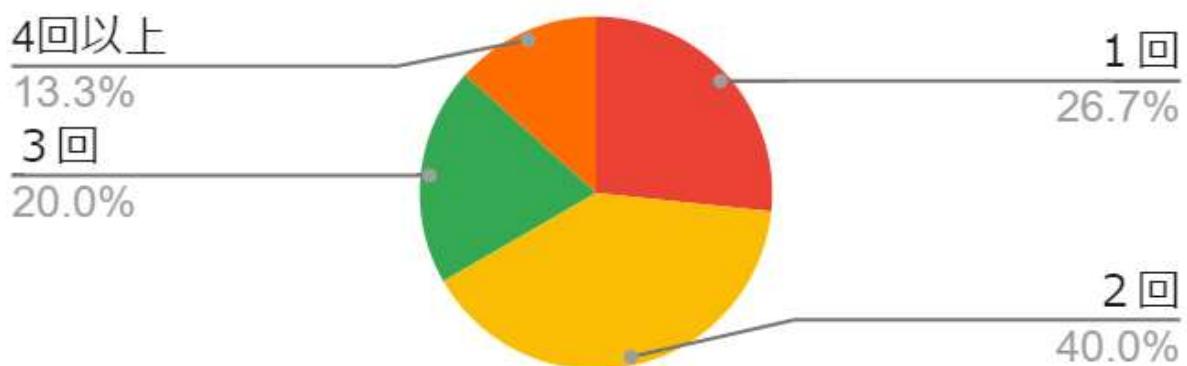
#### 元自衛隊「災害の被災・復興を考える会」のアンケート結果

元自衛隊の有志団体「災害の被災・復興を考える会」のアンケート調査を行い、当団体が協力した。先方同意のもと、このデータを分析すると以下のことが分かった。

被災した家屋のうち、71.4%が公的支援の薄い一部損壊の判定であり、そのため、経済的に困窮している世帯は自力で再建することが難しかった。半年以内で修復できたと回答しているのは28.6%にとどまり、このアンケートを実施した2022年2月時点で未修復が28.6%にものぼるのは、一部損壊の被害が大きかったのが原因であると分析できる。

また、地元工務店を待っている状態であったり、経済的に困窮したりなどの理由から、被災者はボランティアに何回も養生を依頼することになった。修復作業が1回のみであったのは26.7%にとどまり、2回が40%ともっと多く、3回が20%、4回が13.3%という結果となつた。





### (3) 「事業設計の分析」に関する振り返りと学び

#### ③事業設計の妥当性

「課題解決や目指すアウトカムの実現に対し、必要な事業を設計できているか」

- ・当団体が目指すアウトカムの実現のため、必要な事業を洗い出し、各目的に沿った取り組みとなるようロジックモデルに基づいて事業設計を行った。

#### ④事業計画の妥当性

「事業設計に基づき、実行可能性や今後の事業継続等も見据えた具体的な計画を策定できているか」

- ・鋸南町役場、鋸南町社会福祉協議会、屋根対応または室内カビ除去対応の技術系ボランティア団体等と連携し、情報を共有しながら、実行可能性の高い事業計画とすることにつめた。

- ・ロジックモデルを政策した際に定めた事業の柱は、現段階でも妥当と考えられる。月に2回の定例打ち合わせでは、それらの事業の4つの柱を確認することでリマインド効果を得ることができ、事業を行う上でも常にアウトカムを意識して行うことができた。

### (4) 「実施状況の分析」に関する振り返りと学び

#### (4)-1 各アウトプットの達成状況

##### 1)復興ボランティアセンターの運営

###### □外部支援団体からのOJTとセンター運営移行

令和元年9月13日から10月22日まで災害ボランティアセンターが開設されていたが、その後、復興ボランティアセンターに移行し、ボランティアさんが少なくなる中で地元の人が主体となり、復興のための活動をする必要があった。同年12月4日、当団体が発足し、復興ボランティアセンターの運営支援を担うことになった。事業期間を通じて、延べ対応件数は屋根507件、室内カビ除去は220件、合計延べ727件だった。

###### □ニーズ把握

電話もしくは、鋸南町社会福祉協議会に直接お越しいただいた被災者の話を聞き、直接、被災したご自宅にうかがい、被災状態の確認を行った。被災者が今、何に困っているのかを丁寧に聞くことにつとめた。

#### □ボランティアマッチングと協力団体との連携

当団体で把握したニーズについては、屋根対応をするボランティア団体「Revive」、室内のカビ除去をメインとするボランティア団体「鋸南ロータリークラブ・ボランティアグループ」につないで、対応していただいた。現場で活動する団体と常に情報共有しながら、連携した活動ができたことが成果につながった。

#### □人材育成

災害に強い町づくりのために、OJTで人材育成にも力を入れた。屋根リーダー級人材は4人、室内の技術系人材は9人、育成された。

#### □アウトリーチ

高齢化率の高い町であり、生活困窮者や独居高齢者または持病を持っていたりする方が多く、当団体に連絡を直接できる人ばかりではないことから、アウトリーチをかけて、被災者のお宅をおたずねし、被災状況やお困りごとを聞いた。

#### □行政等との連携

被災したまま放置されている空き家や困窮世帯へのアプローチなどについて鋸南町役場の協力を得て、対応を行った。

## 2)地域コミュニティづくり事業の実施

#### □活動報告会

毎月1回、住民向けにリアルの活動報告会を開催したり、または、オンラインにて町内外の人向けに活動報告会を開催することで、当団体の活動内容を多くの人に周知し、質疑応答やフリートークの場を設けることで、交流を深めることができた。

#### □足湯とお茶会

台風被災で公費解体をする人もいる地区では、コミュニティの崩壊が起きそうな状態になっている。そういう地区で「足湯とお茶会」を開催すると、住民が「こういう場があるとうれしい」「人が少なくなってしまったので、みんなと話せてうれしい」という声をきいた。コロナ禍で足湯とお茶会が開催できない時期もあったが、コミュニティ事業は必要であったといえる。11回、開催した。

#### □イベント

地域住民が自分の町で災害が起きたときにそれを自分事として考え、行動できるよう、「災害ボランティアセンター講座」を2回にわけて開催した。第1回目、2回目ともに14人参加。

#### □減災教育（地域に呼ばれているもの）

メディアに紹介されたり、団体の活動が町民に周知されるようになり、町内で放課後子ども

教室など小学生向けの防災教室や学童を対象としたボラティアスクールを開催できるようになった。また、鋸南ロータリークラブ主催の「避難所運営ゲーム（HUG）」に参加するなど、地域の次世代に向けた災害に強い人材育成に取り組んだ。

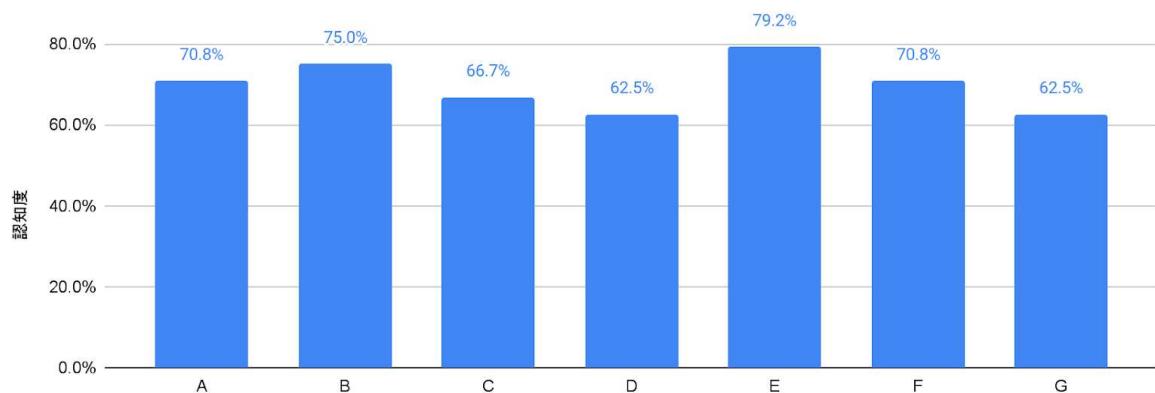
学童向けのボランティアスクール1回、鋸南ロータリークラブ主催の「避難所運営ゲーム（HUG）」1回、放課後子ども教室5回

## 住民アンケートの分析結果

上記アウトプットに関連して、2022年3月に行った本事業の最終報告会において、参加者を対象としてアンケート調査を行った（サンプル数24）。

Q 「当団体は地元団体として、ボランティアセンター運営支援活動等を行って来ました。以下で当団体の活動でご存じのものに○をお願いします。（複数可）」

【アンケート問4】



A	被災ニーズ調査
B	被災者相談窓口
C	ボランティア紹介派遣
D	足湯コミュニティイベント開催
E	毎月、町内広報紙発行
F	活動報告会開催(オンライン報告会)
G	減災、防災啓蒙活動　（出前教室　子どもボランティア教室など）

- 「毎月、町内広報誌発行」が最も認知度が高い。2番目は「被災者相談窓口」、3番目は「被災ニーズ調査」となっており、一定の効果が住民に感じられたと考えられる。

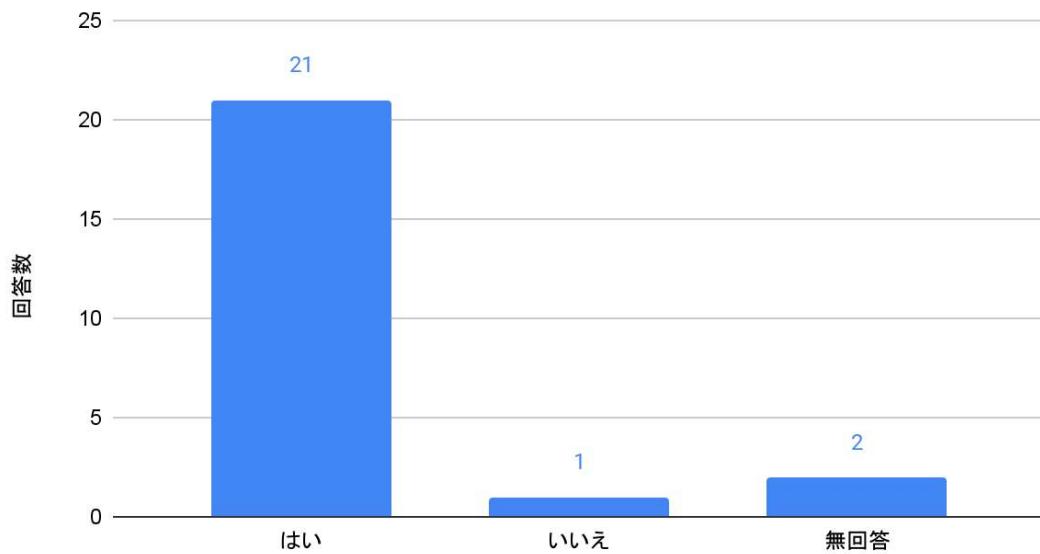
Q 「災害を振り返り、鋸南町に災害対応地元団体は必要と感じましたか」

・コロナ禍では外部支援が限られる。地元に根付いて中長期の支援を行う必要があり、地元団体の必要性は非常に重要。アンケートの問3「災害を振り返り、鋸南町に災害対応地元団体は必要と感じましたか」に対し、サンプル数24のうち24人全員が「はい」と回答した。理由として以下が寄せられている。

- ・自分たちだけだと限界があつて、あきらめてしまっていたと感じたので。
- ・ボランティア皆さんの調整等
- ・住民に寄り添った活動を長期的に継続いただける
- ・いつ自然災害が起きるか分かりません。ほかの地域で起きた場合にも出向いていければ
- ・地元で中長期的に活動を続け、ボランティアセンターで要になる団体がいなければ、復興はできなかつたと思う。
- ・公助・自助も大切だが、共助の必要性大
- ・支援団体とのつなぎ
- ・台風・水害あると思う
- ・災害時のプロが必要
- ・被災者の実態を掌握している
- ・直す業者が少なく、高齢者で低所得者の人は、貯蓄も少なく、当団体の活動には、本当に感謝しています。
- ・災害にあって、どこに相談すればいいのかわからないので
- ・地元の団体を核として、県内外のボランティア団体や行政とのつなぎ窓口的な役割として必要
- ・この時代どんな事がおこるかもしけないので
- ・住民だけで活動は難しいと思う
- ・ボランティアの皆さん、心強かった

Q 「当団体について、今後も災害時のみならず、このような活動に興味がある、または参加してみたいと思われますか。」

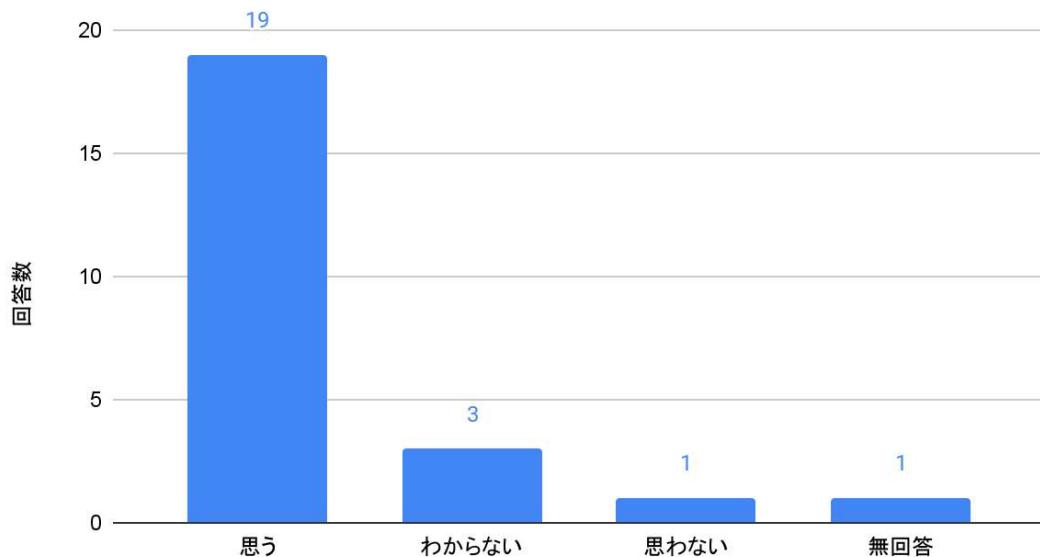
### 【アンケート問5】



24人中、21人が「はい」と回答し、当団体の活動に興味を持っている方が大半であることがわかった。ただし、災害支援が誰にでもできる、参加できるものではないという性質上、「いいえ」の回答が1、「無回答」が2という結果であった。

Q 「当団体は、復興支援に約2年間「休眠預金制度」を活用させていただきました。災害初期には多くの助成金制度がありますが、中長期支援ではないに等しいのが現状です。今回、このような制度を活用したことで一定の効果があったと思われますか？」

### 【アンケート問6】

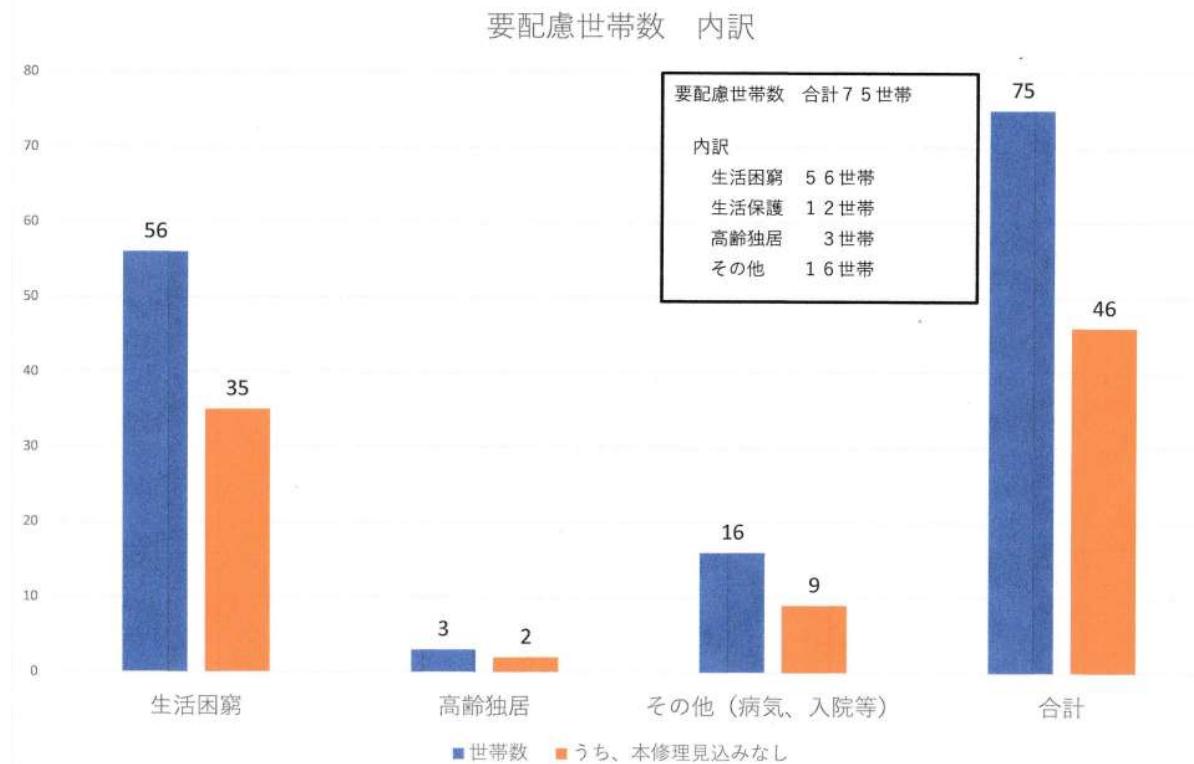


24人中、19人が「思う」と回答していることから、休眠預金を活用したことによる効果を大半の人が実感していることがわかる。「わからない」「思わない」「無回答」の合計が5人であり、約20%が効果を感じていない、もしくは効果がわからないと感じていることから、休眠預金制度について当団体がもっとPRするべきであったというのが反省点である。

※高齢独居は、施設に入ったり。残りたい人だけ。

### 要配慮世帯の分析結果

- ・鋸南町における要配慮世帯について集計をとったところ、計75世帯が確認された。内訳はグラフのとおりであり、生活困窮者が一番多い状況であった（生活困窮と高齢独居が重複する場合は生活困窮にカウント）。
- ・活動初期の時点から、高齢や障害などの要支援者への対応は必要と考えていたが、すでに福祉制度などでの支援や関わりがある方よりも、生活困窮者への対応が困難であることが見えてきた。
- ・保険不加入であったり、国民年金でぎりぎりの生活を行っているために、生活保護などを受けていないケースの方が、家屋復旧と生活維持（医療等を含む）のどちらかを選ぶしかない状況に立たされている方が多かった。また、このような生活困窮や病気、障害のある家族がいるなど、個人の事情を触れられたくないことから、第三者が介入することを避ける被災者も多い。
- ・自らニーズをあげることができないことから、近所に困っている人がいないか、足湯イベントなどで聞きとりを行うことや区長へのヒアリングを行い、対象者を把握して訪問するといったアウトリーチを行った。話をきき、一部損壊などの申請自体も申請がない方もいた。
- ・活動後半では、これらの制度の谷間におり自力復旧が難しいケースに対し、重点的にケアすることを目指し、災害復旧から生活再建へつながるように、ボランティアでできない方を行政や福祉制度につなぐようにした。



### 3) 復興状況等を伝える情報の発信

#### □広報誌

- ・情報発信では、鋸南町役場のご協力を得て、毎月、町報と一緒に広報誌を全戸配布した。高齢化率の高い町であり、こういった紙媒体である広報誌の訴求力は強く、広報誌を見て連絡をしてくる被災者が多かった。また、町の広報誌と一緒に配布されるものであり、町民に認知され、そして安心してご依頼いただくことが多かった。

内容としては、台風直前の防災の呼びかけや、減災に関するワンポイントアドバイス、足湯とお茶会などのコミュニティづくりなどその時期によって内容を変えていった。25回発行した。

#### □ホームページ、SNSの活用

- ・ホームページ

ホームページやSNSを活用し、町内外の人に向けて団体の活動に限らず、防災減災の情報、ニュース、これからボランティアをする人向けにノウハウ動画を掲載していく。

- ・活動報告会の発信

Zoomでほぼ毎月、活動報告会を開催してきた。ボランティアに興味のある人、すでにボランティアをしている人、災害や復興に興味のある地域の人や議員、大学生など幅広い方にご参加いただき、当団体の活動をより多くの人に知っていただくきっかけとなった。

#### □技術的ノウハウのYouTubeなどでも発信

現場の技術系ボランティアのカビ除去に必要な道具やカビ除去の方法などノウハウを動画にしていった。また、それ以外にも、土嚢のつくり方や室内でブルーシートを張る方法など、被災したときに安全に家屋を守る方法を動画にし、他地域が被災した際に、SNSで拡散してもらい、被災地の方に参考にしていただくことにつとめた。

Twitter、Facebookで2021年2月の東北地方の地震、2022年3月16日の地震で福島県相馬市の屋根の瓦が壊れた報道がされたので、当団体が作成した室内でブルーシートを張る動画をSNSで拡散し、屋根に登ることの危険性と訴えるとともに家屋を安全に守る方法を伝えた。

#### □メディア等との連携

##### ・メディア

NHK「おはよう日本」や朝日新聞、千葉日報、房日新聞など、全国的な放送から地元メディアまで幅広く紹介いただくことで、当団体の活動をより多くの人に知っていただくことになった。何度も新聞やNHKなどで取り上げていただくことで鋸南町の復興の状況を世の中に伝えることができただけでなく、地元での反響も大きく、当団体の活動の信頼にもつながった。

##### ・研究

大学の研究対象にもなった。早稲田大学、専修大学の学生の「ボランティア」や「官民連携」などをテーマにした論文執筆の対象となるほか、立教大学の社会福祉を研究している教員にオンライン活動報告会に参加いただくなど、研究者に興味いただくことで当団体としては励みになった。

当団体がFacebookやサイト、広報誌、活動報告会などさまざまな形で取り組みの情報を発信してきたことが、メディアに取り上げていただいたり、研究者の研究対象になる結果につながったと思う。

### (4)-2 評価小項目ごとの評価結果

- 評価計画に定めた評価小項目は以下の⑤～⑦である。評価結果は次のとおり。

評価項目	評価小項目	判断基準		評価結果、考察
		判断方法(指標等)	判断基準値(目標値/状態等)	
⑤実施状況の適切性	計画を具体化しスケジュールに沿って実施できているか	事業スケジュール 進捗報告書 事業実施報告書	ワークショップ参加者の合意	月2回、RCFとの定例打ち合わせの中で事業の4つの柱に沿って繰り返し振り返ることで、事業を計画的に進めることができた。
⑥知見の共有、活動の改善	取組により得られた知見を情報発信しているか	ホームページでの発信	事業を通じて得られた知見をまとめ発信している	鋸南町の被災現場で培った知見をもとに、室内のカビ除去作業に必要な道具、方法、室内でブルーシートを張る方法、屋根作業に必要な道具、ブルーシートで寝袋を作る方法などを情報発

				信した。
⑦組織基盤の強化	団体運営の基本規定や運用体制などを構築できているか	ガバナンス・コンプライアンスに関する規程の整備	事業期間中に整備すべき規程がすべて整備されている	事業期間中に規程整備を行った。休眠事業で求められることは対応できた。

#### (4)-3 事業実施における成功要因と課題

- ・成功要因は、申請時に定めた長期アウトカムをみすえながら、被災者に寄り添うという団体の理念をぶれずに持ち続け、活動をしてきたことにあると思っている。
- ・一定の成果を出し、鋸南町の復興はかなり進んだと言えるが、今度の課題として、これまで取り組んできたことをいかに継続させて、災害に強いまちづくりに生かせるか等まで踏み込めたらなお良かった。
- ・RCFの伴走支援なくして、当団体がここまで成果をあげることはできなかつたと思う。自分たちの取り組みだけを見ていると視野がせまくなってしまうものだが、RCFの職員の方の冷静かつ客観的な視点やアドバイスをいただくことで、自分たちの活動を整理し、定量的な指標も意識しながら事業をすすめることができた。

#### (5)「アウトカムの分析」に関する評価

##### (5)-1 各短期アウトカムの達成状況

###### 【設定した短期アウトカム】

設定した短期アウトカムは以下の2つ。

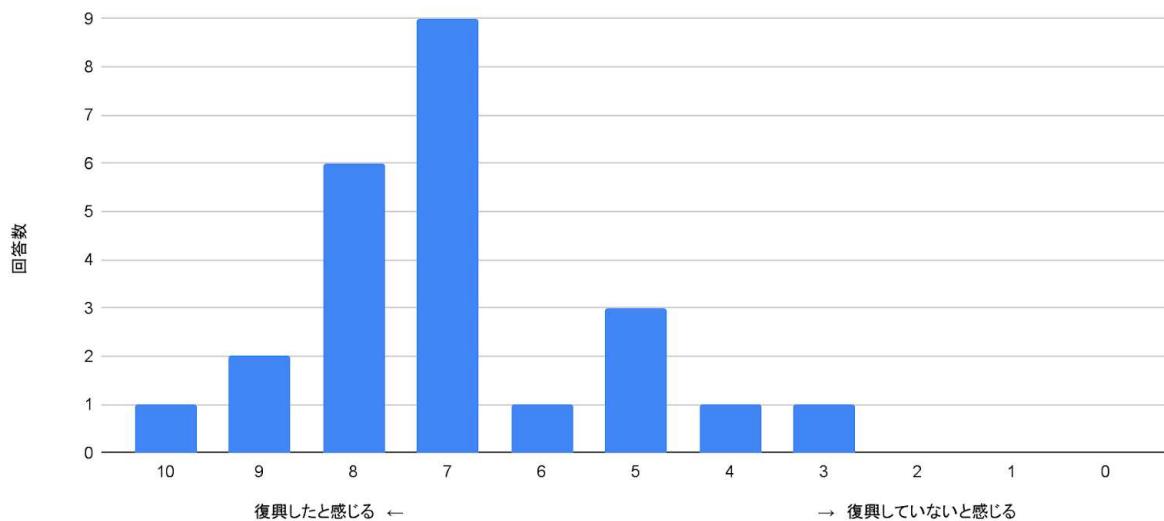
1. 鋸南町において台風被害で家屋が崩壊した被災者に対し、技術ボランティア団体の活動をマッチングすることによって家屋応急復旧支援を提供できている。
  - ・現場の技術系ボランティア団体と定期的に会議をし、常に情報共有をしながら、現在あるニーズを現場団体に引き渡していく。
2. 鋸南町住民に対する「防災・減災への啓発活動や、地域としてのつながりを取り戻すための体制」が整備できている。
  - ・定期的に各地区で「足湯とお茶会」を開催し、地域の人のつながりや心のケアにつながる活動ができたと感じている。また、住民向けの「災害ボランティア講座」を開催したり、放課後子ども教室での「減災ゲーム」や「ブルーシートで寝袋づくり」などを実施。次世代へ向けての防災に関する啓蒙活動も行えたと感じている。

## 住民アンケートの分析結果

上記アウトカムに関連して、2022年3月に行った本事業の最終報告会において、参加者を対象としてアンケート調査を行った（サンプル数24）。

Q 「災害前を10、災害直後を0として、現在はどれくらいまで復興したと感じますか？」

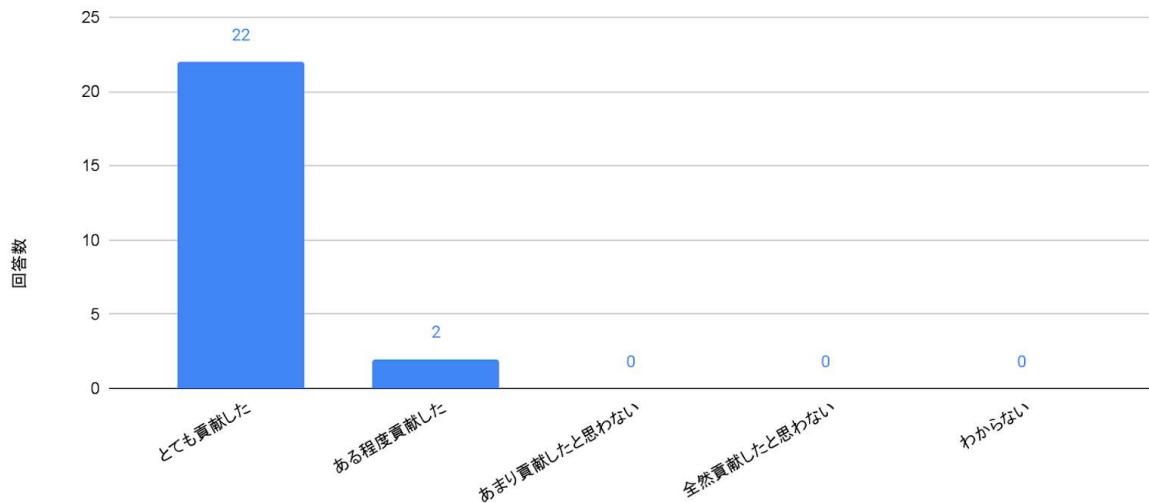
【アンケート問1】



24人中、9人が7割程度「復興したと感じる」と回答。6人が8割程度復興したと回答、2人が9割程度復興した、1人が10割復興したと回答している。以上のことから半数以上は被災前に近い状態まで復興したと感じていると言えるだろう。ただし、4人は「被災前の半分程度またはそれ以下」であると回答している。地区によっては、被災によって、家屋を公費解体し、人口が大幅に減少してしまった場所もあるので、「復興前のとおりに戻す」のは困難であることは事実である。

Q 「鋸南の復興にあたって、当団体の活動がどれくらい貢献したと思いますか？」

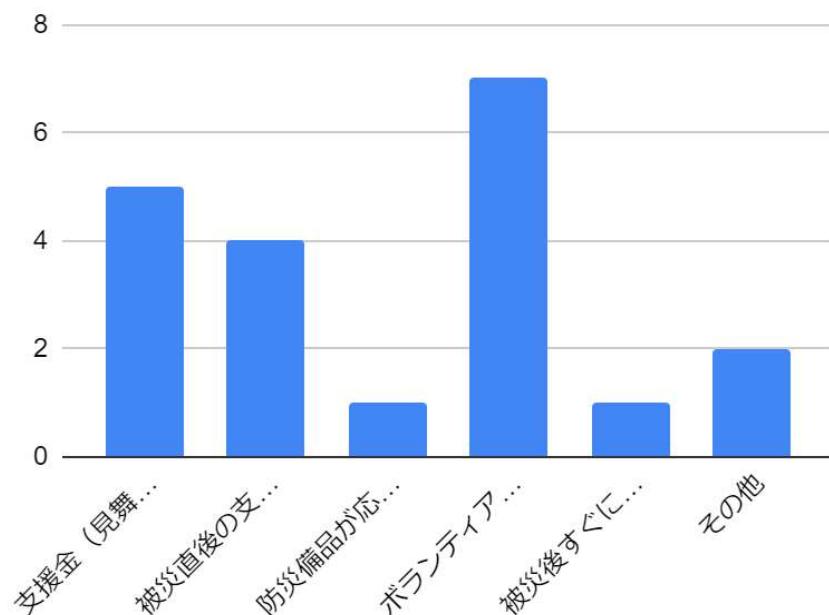
【アンケート問2】



24人中、22人が「とても貢献した」と回答していることから大半の人が当団体の活動が鋸南町の復興に寄与したと感じることがわかった。残りの2人は「ある程度貢献した」と回答。「貢献したと思わない」という回答はなかった。

元自衛官の有志団体「災害の被災・復興を考える会」のアンケート結果から、被災地においては、特に高齢化率の高い町ほど自力で生活再建ができる人がいるため、当団体をはじめ、中長期にわたり現場で活動しつづけるボランティアの力が必要であるという結果になっている。分析結果は次の通りである。

## 被災、復興を経験した立場から、国や社会に対する要望



### 選択肢

- 1 支援金（見舞金）が不十分など、被災者の立場に寄り添った、もっと手厚い行政支援が必要である
- 2 被災直後の支援に重点が行くだけでなく、復興までの間の生活支援や修復費の支援などをもっとしっかりやるべき
- 3 防災備品が応急復旧に偏りすぎ、長期復興までの耐久性の不十分なものばかりだったので耐久性のある防災備品も平時から準備してほしい
- 4 ボランティア活動が頼みの綱だったので、行政はもっとボランティア活動を支援してほしい
- 5 被災後すぐに忘れ去られたので、復興についても定期的に報道するなど、広く日本中に復興状況も知らせてほしい
- 6 その他

行政とボランティアは分けて考えるべきであり、中長期的支援となると、行政の手の届かない支援者が出てくる。鋸南町のケースでいうと、独居高齢者であったり、生活困窮者、二拠点居住をしており助けを求めることが難しい人などである。多くのボランティアが鋸南町に通ってくださることにより助かった被災者がいたことは事実であり、アンケートのとおり、ボランティアをもっと支援する仕組みや制度があるとよいのだが、行政とボランティア団体が連携しながら被災対応をしていくことが、復興への近道であるといえるだろう。

## (5)-2 評価小項目ごとの評価結果

(2) 短期アウトカム	指標	目標値／目標状態	達成状況
1. 鋸南町において台風被害で家屋が崩壊した被災者に対し、ボラセン運営を通して住民の困りごとを把握し、住民が家屋応急復旧支援を受け、住民の不安が低減している	復興ボランティアセンターを通じた屋根応急処置・カビ除去等の実施件数	延500件が支援を受けている	屋根と室内カビ対応については、延べ665件を対応した。
	復興ボラセンやイベント等を通じた支援世帯へのヒアリング等の実施状況	支援世帯に対して、ヒアリングや現地調査に加え、困りごとの状況を傾聴している	被災者からは「安心、安全な生活を確保できた、感謝しかない」「空き家の対応をしていただき、周囲からきれいになつてよかったです」という意見があった。大変ありがたいといった声があった。
2. 鋸南町住民に対する「防災・減災への啓発活動や、地域としてのつながりを取り戻すための体制」が整備できている	復興や地域の防災減災についての地域キーパーソンの確保	地域のキーパーソンがみつかり、防災・防災の推進のための活動に同意、協力いただける関係性がでている	これまで開催してきた「災害ボランティアセンター講座」などにお集まりいただいた方に、発災時にお手伝いいただけるかどうかをアンケートでおたずねし、お手伝い可能な方は、社会福祉協議会に人材登録をしていただいた。

## (5)-3 成果に関する考察

### ・被災者に対する成果

瓦が壊れて、雨漏りがし、カビが発生した部屋の中で暮らす生活を余儀なくされていた被災者が安心した暮らしを取り戻すという点では、現場の時術系ボランティア団体さんと連携することで成果を上げることができた。

### ・事業関係者に対する成果

町内の家屋の7割近くが損壊している状態から復旧、復興に至るまでには、たくさんの人、組織との関係性の構築や協力が必要であった。また、メディアでの露出も活用しながら、多くの人や組織とつながりながら、互いの力を補いながら被災者支援そして復興を目指すことができた。

### ・社会に対する成果

全国的に見ても、台風被災で町の7割近くの家屋が損壊するというのは非常に珍しいケースであり、瓦が壊れた家屋には雨水が侵入し、その後、カビが発生するということはほぼ知ら

れていない。技術系ボランティア団体「鋸南ロータリークラブ・ボランティアグループ」に協力いただきながら、家屋のカビの発生とそれによる健康被害が起きる可能性について情報発信することができた。また、被災によって空き家が被災家屋となり、放置されており、それが社会的課題になっていることをメディアを通じて訴えかけた。

#### 4. 持続可能性

##### (1)今後の取り組み

今後は、鋸南町社会福祉協議会に直接お越しいただいた方を当団体につないでいただくか、または電話に直接ご連絡いただくことで活動を継続していく。これまで、取り組んできた防災教育は継続していく予定である。また、災害ボランティア講座にご参加いただいた方や「足湯とお茶会」イベントにご参加いただいた方々とのネットワークを、今後の町の防災や減災に生かしていきたいと考えている。

##### (2)自己資金

(2)-1 契約当初集める予定だった総額 計0円

(2)-2 集められた自己資金の金額と種類 計45,299円

ヤフー募金を開設し45,299円を得た。

##### (2)-3 資金調達で工夫した点

サイトやSNSで情報発信をし、メディアにも取り上げていただくなど、まず多くの人に団体の活動や鋸南町の復興状況を知っていただくことにつとめた。

その上で、Yahoo！ネット募金に団体の活動と現場で困っていることなどを詳細に記述し、募金を集めた。また、ツイッターやサイトでも目立つ場所に、Yahoo！募金のロゴを掲載し、当団体に興味を持っていた方に募金しやすいようにした。

## 5. 広報、外部との連携の実績

### (1) メディア掲載 (TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等) [格納フォルダ](#)

- ・別紙① メディア等掲載一覧[1]

 休眠預金実行団体メディア掲載情報 メディア+サイトのリンク

### (2) 広報制作物・報告書等

- ・別紙② 広報誌

<https://kyonanacceleration.org/category/newsletter/>

### (3) シンボルマークの活用と方法

- ・全戸配布の広報誌に掲載・事務備品・消耗品に使用
- ・HPに掲載

### (4) シンポジウム、セミナーなどのイベントの開催等

- ・別紙③ イベント

<https://kyonanacceleration.org/category/event/>

- ・別紙④ 活動報告

<https://kyonanacceleration.org/category/report/>

## 6. 外部との連携の実績

### (1) 外部との連携の実績

団体名	内容
鋸南町役場	広報誌の発行にご協力いただいた。また、空き家や生活困窮者についても情報共有しながら対応していった。
鋸南町社会福祉協議会	事務所をお貸しいただいただけでなく、高速道路無料措置のために県社協、千葉県、ネクスコにニーズ情報をあげていただくことにご協力いただいた。
鋸南ロータリークラブ・ボランティアグループ	室内カビ除去を専門とする技術系ボランティア団体であり、当団体が受け付けたニーズの室内については、この団体に対応いただいた。
Revive	屋根専門の技術系ボランティア団体であり、当団体が受け付けた屋根ニーズについては、この団体に対応いただいた。
国際NGOアドラジャパン	災害ボランティアセンター運営について災害初期において、協力していただいた。
ピースボート災害支援センター	災害ボランティアセンター運営について災害初期において、協力していただいた。
千葉南部災害支援センター	鋸南町以外で台風15号によって被災した市町村の情報を把握しており、情報共有会議にご出席いただき、他地域の情報をご提供いただいた。また、千葉県の災害ボランティアのネットワークであるCVOARDなどを創設していただいた。
房日新聞社	地元新聞社であり、当団体のイベント情報を頻繁に記事として掲載くださいました。
NHK	「おはよう日本」などで当団体の取り組みを紹介いただいた。
朝日新聞社	カビによる健康被害のリスクを取り上げ、周知に協力いただいた。結果、災害支援の対象にカビ除去の必要性が認められる。

## 7. 教訓・提言

### (1)教訓・提言

台風災害復興支援活動を通して感じた事は、台風災害は事前に予測や対策が可能であり、それらが被災状況を軽減させる事が出来ると言う事です。そのためには、常日頃から災害への意識を高め具体的な対策を知る必要があります。

行政・自治体の防災対策の強化のみならず、まずは被災者となりうる私達一人一人が、備えを行い また、発災時にはどのような行動を行うのかを想定する事が大切です。災害の記憶がまだ実感と共ににある内に『防災・減災』を学ぶ場を作っていく事を声を挙げて行きたい。

・災害復興支援活動を行う中で、被災者の復興への格差がある事が見えてきた。資金・協力者・保険・法制度など、円滑に活用し自力で立ち直れる被災者も実際に多い中、それらが無い または、旨く活用出来ない高齢化や障がいにより理解に至らないケースがあり、支援側からの声が届かず、そして支援すべき被災者からの声が届かない事が多々ありました。

長期的な活動の継続、繰り返し調査する事で発見し対応する事が出来た事は良かった事である。災害時には、埋もれてしまい 声を自身で挙げれない被災者がいる事実を受け止め、声無き声に耳を傾ける事を大切にし、対策を提示するだけでなく、しっかりと活かされる所まで関わる支援を、と願います。

#### ・情報発信 共有の必要性と効果

今回の被災は、発災からしばらく被災状態が周囲に伝わらず支援が遅れた事実があります。発災からいかにして早く状況を把握し、救援の要請を挙げれるかが多くの人命救助に繋がります。私達は活動を通し、多くのメディアとの繋がりや災害救援活動を行う団体との縁を得ました。

発災時には、情報を発信し 正確な情報を共有する事を状況が変化する中で適宜行う事が大切である。被災地が風化しないためにも、情報が支援者だけに留まらない様に。

・長期的な復興支援活動を行うには、自治体、行政との的確な連携が必須であります。それぞれの機関にしか出来ない事があり、それが特色を生かして目的を一つにして行動した事が復興を促進しました。広域な支援が出来る行政には難しい、被災者個々に寄せた支援は民間団体に適しており難解なケースも解決へ導けました。それぞれの得意な点や行える支援の範囲を相互に把握し、迅速に分担して適切な機関への引き継ぎや連携を行えるように備えてほしい。

#### ・被災地団体 または、被災地から生まれる

災害対応人材の必要性。相次ぐ災害やコロナ感染症の蔓延により、災害時のボランティア等 対応人員が不足する状況があり、また予測されます。災害時には現場対応のみに有らず、避難所、ボランティアセンターにも人員が必須で、日頃から協力者を募り、定期的に訓練やコミュニケーションを深める事が望ましい。災害は最終的に地域の課題となるため、その意識を持ち皆で復興に進んでいけるお互いを見守れる関係性の構築に務めて欲しい。

・災害により、人口減やコミュニティーの減少を防ぐ必要があります。高齢化が進んでいる地域では自身の生活を自力のみでは困難であり、助け合いが大切であった。しかし、災害により、やむなく転居されたり コロナ感染症の影響で関わりが減った、または、無くなってしまうケースが多々見受けられる。被災者が抱えている悩みや苦しみは内側へ向かい、こもってしまいます。

コミュニティー再生支援を行っていく中で様々な相談を受け解決策を見つける事も出来ました。日頃の関わりや不安を打ち明けられる場を持つ事は、被災後の生活に希望を持つきっかけとなり、被災者が立ち上がる希望となるでしょう。心の復興を目指し人と人が繋ぐコミュニティーを作る事が復興のゴールと私達は考えています。

## その他

### ■別添

- ・事前評価報告後に見直した事業計画[1]（別紙⑥）やロジックモデル[2]（別紙⑦）
- ・事後評価報告時の事業計画[3]（別紙⑧）やロジックモデル
- ・ガバナンス・コンプライアンス体制の整備・運用実績の確認リスト[4]（別紙⑨）

### ■規程類の整備実績

(1)事業期間に整備が求められている規程類の整備は完了しましたか。：完了

(2)整備が完了した規程類を自団体のwebサイト上で広く一般公開していますか。：全て公開した

(3)変更があった規程類に関して資金分配団体に報告しましたか。：変更があり報告済